

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第191号

イザヤ 65:1

平成23年8月26日

日に日に、人々がダビデを助けるために彼のもとに来て、ついに神の陣営のような大陣営となった。主のことばのとおり、サウルの支配をダビデに回そうと、ヘブロンにいるダビデのもとに来て、武装した者のかしらの数は次のとおりである。ユダ部族で、大盾と槍を手にし武装した者六千八百人。シメオン族から軍務につく勇士七千百人。レビ族から四千六百人。エホヤダはアロンのつかさで、彼とともにいた者は三千七百人。ツアドクは若い勇士で、その一族には二十二人のつかさがいた。サウルの同胞、ベニヤミン族から三千人。これまで、彼らの大多数は、サウルの家の任務についていた。エフライム族から二万八千人。勇士で、その一族に名のある人々であった。マナセの半部族から、ダビデを王にしようとしてやって来た名の示された者一万八千人。イッサカル族から、時を悟り、イスラエルが何をなすべきかを知っている彼らのかしら二百人。彼らの同胞はみな、彼らの命令に従った。ゼブルンから、従軍する者で、完全に武装し、戦いの備えをした者五万人。彼らは心をついて集まった。ナフタリから、つかさ一千人。彼らのもとに、大盾と槍を持つ者三万七千人。ダン人から、戦いの備えをした者二万八千六百人。アシェルから、従軍する者で、戦いの備えをした者四万人。ヨルダン川の向こう側、ルベン人、ガド人、マナセの半部族から、戦いのために完全武装をした者十二万人。誠実な心で、並び集まったこれらの戦士たちは、ヘブロンに来て、ダビデを全イスラエルの王にした。イスラエルの残りの者たちもまた、心をついてダビデを王にした。 歴代誌第一 12:22-38

冒頭に引用したくだりには、サウル王が息子たちとともにギルボア山でペリシテ人の手で打ち殺された後、ダビデを全イスラエルの王として受け入れた各部族のかしら、勇士たちが、ヘブロンのダビデのもとに集まって来たことが記されています。ユダ、シメオン、レビ、ベニヤミン、エフライム、マナセ、イッサカル、ゼブルン、ナフタリ、ダン、アシェル、ルベン、ガドの順にイスラエルの全十三部族名が挙げられ、各部族を代表する戦士たちの数が記され、いかに多くの勇士たちが心からダビデを王として迎え入れたかを描いた何の変哲もないくだりに見えますが、注意深く読むと、歴代誌の著者が示唆している重要な洞察を得ることができます。記されている数を文字通り、ダビデ王を祝う祭りに参加した者たちの数とすれば、三十四万八千人の者がヘブロンに集まったことになり、これは「**神の陣営のような大陣営**」に示唆されている、来るべきメシヤの王国を予兆しているものと捉えることができます。また、ユダ族とベニヤミン族の領土から遠く離れたカナン最北端の地を割り当てられた部族とヨルダン川東岸の部族が送りだした勇士たちの数を合わせると二十七万六千六百六十人にも上り、このことはダビデ王朝がイスラエルの全部族によって支持されたことを強調的に描き、やはり来るべきメシヤの王国のひな型であることが示唆されているようです。しかし、得られる洞察はそれだけではないのです。

どの部族も武勇を誇る多くの戦士たちを送って、ダビデを助けることを象徴的に示したのとは非常に対照的に、イッサカル族は戦士ではない「二百人のかしら」を送っただけでした。人数からも武器を取っての戦闘力からも見劣りするこの二百人は、しかし、「**時を悟り、イスラエルが何をなすべきかを知っている**」、神からの深い洞察に恵まれた者たちで、同胞はみな、この指導者たちの命令に従っていたのでした。王の戴冠の祝賀会という華やかな公の行事に臨んで、イッサカル族のこの世の通念に迎合せず、神を第一優先にすることをはばからなかった堂々とした姿勢は称賛に値するものです。イッサカル族は、この世の事象、一天災、人災一を通して神の御旨、神のご計画の「とき」を知ることでできる指導者こそ、ダビデ王朝を強力に支える力であるとみなしたのでした。神の真のしもべとして神の御旨によく通じていたダビデ王にとって、これらの指導者の存在は、他部族のどの軍勢力よりも大きな支えとなったことでしょう。

イッサカルはレアに五番目に生まれた、ヤコブの九男で、その名の意味は「報酬」でした。ヤコブが息子たちに与えた預言「**イッサカルはたくましいろばで、彼は二つの鞍袋の間に伏す。彼は、休息がいかにも好ましく、その地が、いかにも麗しいのを見た。しかし、彼の肩は重荷を負ってたわみ、苦役を強いられる奴隷となった**」(創世記 49:14-15)では、イッサカルは不平も言わず黙々とくびきを負う「**たくましいろば**」にたとえられています。イッサカルは律法のくびきを負う、すなわち、イスラエルの民の霊的遺産を掘り起こすべく、黙々と霊的苦役を担う影武者になると告げられたのでした。イッサカルの嗣業の地は、終末の末期、反キリストの軍勢とキリストの軍勢が最後の決戦を迎えることが預言されている「メギドの丘」から見渡すことのできる広大で肥沃、麗しい「イズレエルの谷」で、この部族はそこでゆっくり休息することを好んだのでした。民数記に記されている人口調査では、出エジプト後、荒野でイッサカル族の人口は飛躍的に増加したのですが、カナンの地に移住後は、最北端という場所のゆえに、よく侵略軍の標的になり、占領下に置かれたことを、このヤコブの預言は見

事に言い当てています。カナンの侵略軍は、戦うより服従すること、勇敢に戦うより恥と隷属下に置かれるほうを選んだ無抵抗のイッサカルにくびきを負わせ、奴隷にしたのでした。

神の人モーセがイスラエルの十三の部族を祝福した最後の預言では、イッサカル族はゼブルン族と対で、「ゼブルンよ。喜べ。あなたは外に出て行って。イッサカルよ。あなたは天幕の中にいて。彼らは民を山に招き、そこで義のいけにえをささげよう。彼らが海の富と、砂に隠されている宝とを、吸い取るからである」(申命記 33: 18-19) と語られています。これは、ゼブルン族は「外に出て行って」に象徴されるように、海洋の商取引で成功を収め、片や、イッサカルは「天幕の中にいて」に象徴されるように、国内需要を満たす農業に秀で、あるいは、静かに律法に献身することになると解釈されるものでした。ここには、両部族とも、海の幸、地の幸の恵みに与るようになることも語られています。まさに忍耐の末、最後には、隠された「報酬」に与ることになる民がイッサカル族でした。

キリストは、ご自分の初臨でもたらされ、再臨で完成する「神の国」について、多くのたとえを通して語られました。繰り返し強調されたことは、キリストに従う者たちがこの世の事象をよく見きわめ、祈り、「とき」を悟ることの大切さで、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と、信仰を最後まで持ち続ける者が「報酬」に与ることになることを約束されました。「腰に帯を締め、あかりをともしいなさい。主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたなら、すぐに戸を開けようとその帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい……このことを知っておきなさい。もし家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう」(ルカ 12: 35-39)、「あなたがたは、西に雲が起るのを見るとすぐに、『にわか雨が来るぞ』と言い、事実そのとおりになります……偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。また、なぜ自分から進んで、何が正しいかを判断しないのですか」(ルカ 12: 54-57)、「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら、しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている……それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ」(ルカ 19: 42-44)、これらの御言葉で語られたことは、ご自分の教えに耳を傾けることも、メシヤとして認めることもしなかった同胞、一まさに、この世の事象を霊的に洞察することができず、イッサカル族のように「神の国のくびき」を負って生きることのできなかつたユダヤ人— に対するキリストの叱責、警告でした。

また、キリストはご自分の再臨によって「神の国」が地上に具現する時代の直前のしるしの数々を弟子たちに詳細に語られました。そのときキリストは「いちじくの木や、すべての木を見なさい。木の芽が出ると、それを見て夏の近いことがわかります。そのように、これらのことが起るのを見たら、神の国は近いと知りなさい……その日がわなのように、突然あなたがたに臨むことのないように、よく気をつけていなさい……その日は、全地の表に住むすべての人に臨むからです……いつも油断せず祈っていなさい」(ルカ 21: 29-36) と、やはりイッサカル族のように最後まで忍耐強く、この世の事象を見、悟る必要、主に信頼していつも祈る必要があることを警告されました。

今日、私たちの回りではすべてが揺り動かされ、道徳観、価値観、概念、定義、習慣、常識、善悪の基準、規則等、すべてが目まぐるしく変わっています。大自然や地球の地軸、地形、磁場も大地震や大洪水、大津波、大竜巻などによって動いていることが報告されています。天においても地においても、世界的にも局地的にも、対外的にも社会的にも、政治的にも財政的にも、これまでの体験や知識では予測や判断ができないことが相次いでおり、全人類は間違いなく、聖書が明確に預言している人類文明の崩壊の時期にさしかかっています。バビロンのネブカデネザル王が見た巨大な像、「頭は純金、胸と両腕とは銀、腹とももとは青銅、すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土」に象徴される人類文明に続き、「一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを打ち砕(き)」、「そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金もみな共に砕けて、夏の麦打ち場のみがらのようになり、風がそれを吹き払って、あとかたもなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土に満ち(る)」(ダニエル書 2章) 出来事、すなわち、キリスト支配の「神の国」の到来によって、暗闇の主、サタンに支配されてきた現存の人間の諸王国が取って替えられる時代が非常に近づいているのです。

聖書の預言に加えて、科学者たちも近い将来、かつてない天変地異の起こる可能性を認めています。全国的な異常気象、地球が氷河期に向かっていることを裏づける太陽の黒点数の異常、自然界の生物の突然死や突然消滅などの奇怪現象、地球の磁場、磁極、地軸の変化、火山爆発、巨大地震、大洪水等々、大自然がもたらす大災害、戦争、内紛による人災、数え上げればきりがないうほど多くの突発的、脅威的出来事が世界中で起こっており、その頻度は日増しに増え、規模、強度も大きくなっています。イッサカル族がダビデ王の戴冠の祝いに、神の御旨を知り「とき」を悟ることのできる「神を恐れる」指導者を送ったように、この激動の時代に要求されるのは、富、最新鋭の武器、大規模な軍事力、戦士の数ではなく、霊的洞察で「とき」を悟り、神に執り成すことのできる少数の「信仰の人」なのです。それはパウロが語ったように「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するもの」だからです。